

1 3. 公営住宅における住民組織の確立

千本ふるさと共生自治運営委員会（略称じうん）
（京都府京都市）

1. 活動の背景と目的

京都市内の北西部に位置する千本地区は、かつては不良住宅が密集する地区であったものの、1950年代からの住環境改善事業に伴い、まち全体が大きく変化することになりました。その契機は、1969年に制定された同和地区に対する時限立法でした。

戦後、千本における住環境整備は京都市行政が千本の土地を買い取り、そこへ公営あるいは改良住宅を建設するといった方式がとられました。そして、現在、合計20棟の公営住宅が建ち並ぶまちへと様変わりしました。たしかに住民の暮らしは、コンクリートの安定ある住居で、建設当初は快適であり、誰もが公営住宅の建設を待ちわびたものでしたが、1970年代半ばから、徐々に人口の流出が起これ、千本地区全体の活気が失われていきました。とりわけ、流出した層は、働き盛りの世帯でした。当然、子どもを伴った流出ですから、必然的に千本地区における高齢者の割合も高くなりました。しかしながら、この流出した住民の人々は、転居をするものの、持ち家を千本地区周辺に求めるという傾向があります。つまりこの現象は、千本に住みたいが、現在のライフスタイルに適應しない住宅（公営住宅・改良住宅）に対する不満が引き金となり、一定、経済的に安定している働き盛りの層が転出しているのではないかと、推測できます。

このように、人口が減り続け、そして活気が失われていく千本を、どのように魅力あるまちに再生するのかを考えるために、1993年に「千本ふるさと共生自治運営委員会（じうん）」が設立されました。折しも、千本で一番最初に建設された公営住宅（楽只第1・2棟 1958年）の建て替えの話が持ち上がっている時期であり、千本では、「じうん」が中心となり、第二期のまちづくりが展開されることになりました。この「じうん」は、「共生・永住・自治」を理念と掲げ、それまでの行政主導のまちづくりではなく、住民参加のまちづくりを提唱しました。93年に発足して以降、建て替えといった大きな事業のみに着目するのではなく、「まずは、何かできることから」まちづくり運動を展開することにし、タウンウォッチングを実施し、自分たちのまちを見つめることから始めました。また、あらゆる世代の人々の参加が必要だと考え、千本地区内にある保育所の子どもたちや、その保護者に参加してもらい、千本の遊び場マップの作成などを



千本地区公営住宅

実施してきました。このように、いわばソフト面での取り組みと同時に、千本の将来の基本計画（案）もワークショップ方式のもと90年代半ばに策定してきました。

II. 活動の内容

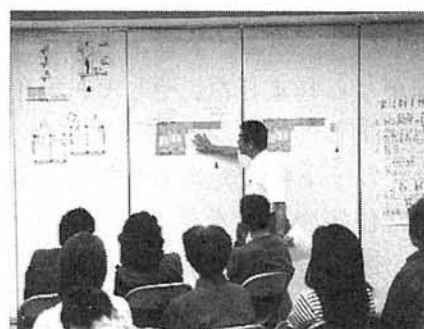
そして、いよいよ97年の秋から、本格的に京都市内の同和地区で初めてとなる建て替え計画が、建て替え対象棟の住民の参加のもと始まりました。じうんにとっても、行政にとっても初めての経験であり、予想以上に時間（約2年）を費やしましたが、住民主体で新1棟の基本計画（案）を策定することができました。

しかしながら、予定の2000年夏までに建設工事に着工することができませんでした。その理由としては、新1棟建設予定地周辺の人々の反対があったからです。初夏から約半年間のじうん活動は、当初計画していた「コーポラティブ住宅」の実現に向けた取り組みに専念することができず、いかに周辺の人々と新1棟の住民の方が、快適に暮らせるかを模索すべく、新1棟の基本計画（案）の見直しについて議論をくり返しくり返し、行政と行いました。日照権の問題も課題の一つとしてあったので、新棟そのものを、一定方向にずらす等の変更を行い、最終的には、周辺の方の理解を得ることが出来ました。このように、建て替え計画については、常に住民の意見を代表する立場として、「じうん」がその役割を担ってきました。行政と建て替え対象棟の住民の方が直接物事を決めるのではなく、どのような決定においても、事務局会議を経て決めてきました。

2000年度末、建設工事が始まったわけですが、2001年6月までに新1棟の住戸、一軒一軒のクロス等を決めるワークショップを実施します。その際には、どのように樹木を管理していくのか、お互いがより気持ちよく住むための生活ルールを決める予定です。

III. 活動の効果及び今後の課題

さて、新1棟の建て替え計画と同時に、じうん事務局会議で、「コーポラティブ住宅」の可能性を行政と話し合いを行ってきました。常に平行線をたどる議論ではありましたが、先述した人口流出の問題を背景に持つ千本地区での「コーポラティブ住宅」の必要性を訴えてきました。制度の検討は行政内部で行っているようですが、その詳細については、未だ聞くことはできません。しかしながら、「コーポラティブ住宅」に興味のある人々や、行政の方も集い、見学会を実施したり、あるいは先進地と言われるまちへの視察を行うなどの取り組みを行ってきました。残念ながら、コーポラティブ住宅について大きな前進がなかったことは事実としてありますが、制度の策定というプロセスも通らざるを得ないものかとも考えます。

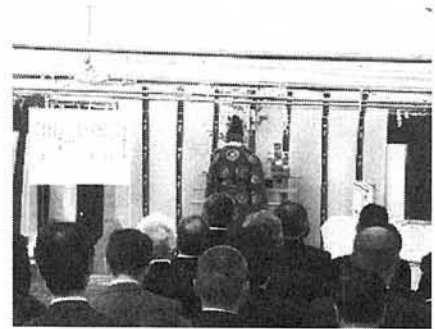


1・2棟建替ワークショップ (00.5.9)



住棟まわりのワークショップ
(00.6.28)

また、2001年の取り組みとして、立命館大学（乾ゼミ）のメンバーとともに、次期建て替え対象棟となる世帯への聞き取り調査を実施しました。現在の暮らしで困っていること、建て替えに対する期待・希望、また千本の人々が「じうん」をどのように見ているのか等、学生だけが、あるいは「じうん事務局」と一緒に、お宅を訪問し話を聞きました。なお、この調査結果は、3月末に千本でまずは調査に協力して頂いた行政の方や「じうん」の参画団体の人々を招いて、報告会を開催しました。そして、この結果を千本の人々にも知って頂くために、まちづくり新聞を通じて発表していく予定をしています。



新1棟起工式